Ⅱ　特徴的な活動　「 震災を生き抜くすこやかな城東っ子の育成
～いたわり はげましあい きずなの力を育む健康づくり～ 」

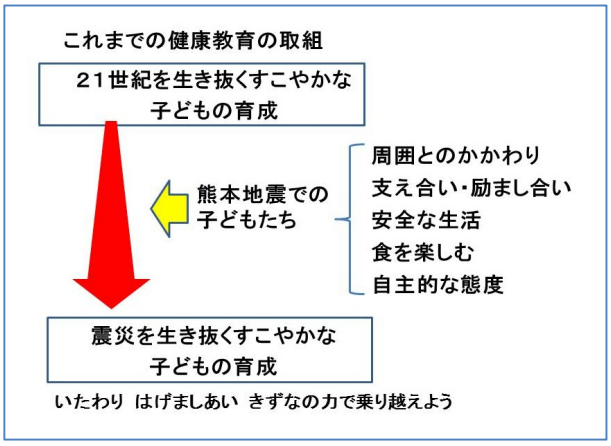
１　重点課題と活動のねらい

（1）課題の把握と設定状況

４月中旬に発生した２度にわたる大地震によって児童の日常生活は失われ，心身ともに不安定な状況となった。本校の体育館や運動場は避難所として利用され，学校は約１か月にわたって臨時休校となった。多くの児童は車中泊や避難所・親戚宅での避難生活を送った。余震が続く中，不自由で不安の多い避難生活は，大人にとっても辛く厳しいものであった。

しかし，避難所でも生き生きと活動する児童の姿からは，「すこやかに生き抜く子ども」の育成に取り組んできた本校の健康づくりの成果が見られた。児童が笑顔で周囲の人と進んで関わり，避難所業務の手伝いをする姿は避難所の雰囲気を明るくした。本校避難所を訪れた人からは,「城東小学校は, 避難所とは思えないほど笑顔にあふれている」と言われるほどであった。

震災から約１か月後，学校が再開した。これから自分たち学校職員は児童とどのように関わり，児童のどんな力を伸ばしていかなければならないのだろうか。震災後の職員研修で，意見を出し合った。その中では，避難生活や学校再開後登校してきた児童の姿から，これまでの健康づくりの取組を積極的に評価し，継続することの大切さを確認し合った。そのことが，いかなる状況にあっても，生き抜くことのできる力につながると考えた。そこで，主題を「震災を生き抜くすこやかな城東っ子の育成」として,「いたわり, はげましあい, きずなの力でのりこえる子どもたち」を育成しようと考えた（図１３）。



【図１３　特徴的な活動構想図】

（2）活動のねらい

震災によって損なわれた児童の心と体の健康を取り戻し，さらにすこやかな児童の成長を目指すための健康づくりに取り組む。

・震災によって児童の生活や健康はどのような影響を受けたのか。また，その中で児童はどのような姿を見せていたか。
・震災の中での児童の様子にあらわれたこれまでの健康づくりの成果とは。
・震災後，これからの社会を生き抜くために児童に必要な資質とは。

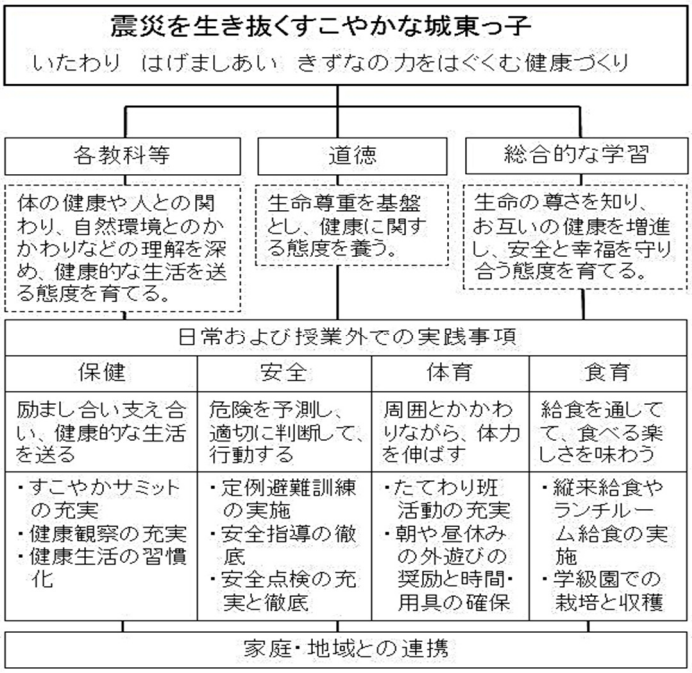
以上の３点を明らかにしながら，今年度の健康づくりを推進する。

2　計画と実践の状況

（1）全体及び年間指導計画

今回の取組にあたっては，健康教育全体計画（資料５）及び健康教育年間指導計画(資料６－１，６－２）をもとに，図１４に示す全体計画及び年間計画を作成した。

５月中旬，震災による学校再開後職員研修を行い，保健・安全・体育・食育の視点から必要な実践事項を検討し，取り組むこととした。



【図１４　特徴的な活動全体計画】

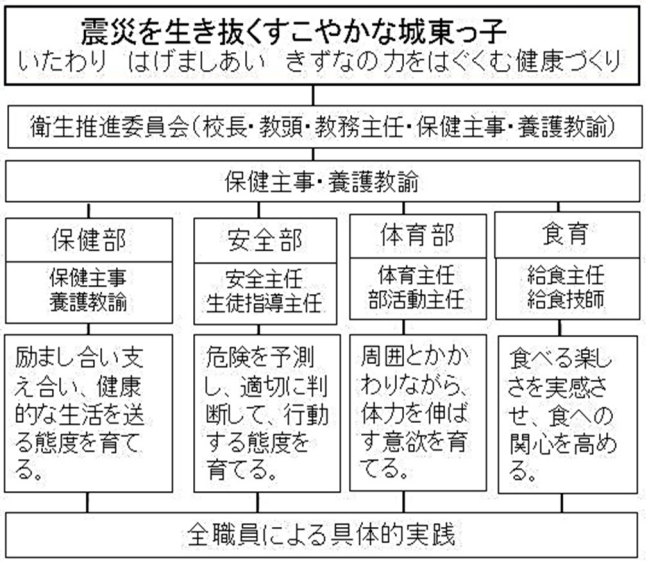
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
保　健					第１回すこやかサミット					第２回すこやかサミット		第３回すこやかサミット	
			歯みがきツアー	歯みがきツアー			校内歯と口の健康作品展		歯みがきツアー			歯みがきツアー	
	身体測定時の保健指導	……→											
			心と体の健康相談	……→									
			心と体の健康観察	……→									
安　全	避難訓練	……→											
	地区児童会集団下校		地区児童会集団下校	１年交通教室	地区児童会集団下校	地区児童会集団下校	３年自転車教室		児童引き渡し訓練	地区児童会集団下校	地区児童会集団下校		地区児童会集団下校
食　育	お誕生給食	……→											
	たてわり給食			たてわり給食	……→								
					ランチルーム会食２年		ランチルーム給食３年	ランチルーム給食４年	ランチルーム給食５年	ランチルーム給食６年			
	栽培	……→	収穫	収穫	収穫			収穫	収穫			収穫	
								１年給食試食会	ふれあい給食		ふれあい給食		
体　育	青空活動（朝）	……→	ストレッチ姿勢体操	たてわり班遊び	たてわり班遊び	たてわり班遊び	肥後っ子体操・集団行動	肥後っ子体操・集団行動	５分間走長縄跳び	たてわり班遊び	５分間走長縄跳び	５分間走長縄跳び	たてわり班遊び
				青空タイム（昼休み）	……→								
その他			城東っ子集会	たてわり掃除				たてわり掃除	城東っ子集会			たてわり掃除	お別れ遠足
ＰＴＡ		通学路点検	通学路点検		ＰＴＡ総会	はりきり表除草作業			（児童引渡し訓練）	はりきり表			ＰＴＡ総会

【図１４　特徴的な活動年間指導計画】

（2）組織体制

「震災を生き抜くすこやかな子ども」に近づけるために，４つの部会がそれぞれのめあてに向けた取組を提案していく。

そして，保健主事・養護教諭が中心となって連絡・調整を行い，連携を図りながら全職員の共通実践化を目指す（図１５）。



【図１５　特徴的な活動組織体制】

（3）活動の実践状況

① 関わりあって課題を克服する

ア 避難生活においても進んで関わる

震災による臨時休校は，約１か月間続いた。自宅や親戚宅また避難所で生活している児童と学校はどのようにつながっていくのか。また，児童同士のつながりを切らないようにするにはどうすればよいか，試行錯誤の中で取組を始めた。

まず，児童や保護者とのコミュニケーションを図るための家庭訪問と電話連絡を行った。家庭訪問では，担任だけでなく専科や養護教諭など児童と関わる職員も家庭を訪れて，児童や家庭の様子をうかがうとともに，「学校」や他の児童のがんばる姿を伝えた。

そして，まだ余震が頻繁に続く中ではあったが安全を確保しながら，可能な限り校舎内を活動の場として開放した。音楽室にはビデオ鑑賞ができるように暗幕を設置し，その廊下には図書室の本を並べて自由に読書ができるようにした。

震災によって児童が周囲と関わる機会は，非常に限られてしまったが，児童は避難所生活の中でこれまで以上に周囲との関わりを深めていった。夕食後に運動場で行った夜のスポーツ大会では，高学年と低学年，中学生，他校の児童・生徒が，ルールや場を工夫しながら自分たちでゲームを進めることができた。運動場には車中泊の自家用車が多く，限られたスペースの中でドッジボールなどのボール運動を行った。人数に対してスペースが狭く交代を繰り返しながらのゲーム，学年差による能力差の大きい中でのゲームになってしまったが，上の学年の子どもは下の学年の子どもにボールを譲ったり，アドバイスをしたりして，みんなが楽しめるよう心がけていた。

さらに朝７時のラジオ体操。児童にとって規則正しい生活を送るうえで貴重な時間である。職員のアイデアでこのラジオ体操の後にダンスを取り入れた。運動会で低学年が踊った「OLA！（歌ゆず）」のダンスは全学年の児童がふりを覚えているほど人気のある踊りである。このダンスを踊るようになって児童は真っ先に運動場に集まるようになった。そして自分たちの大好きなダンスをみんなに教えて元気を広めるという自分たちの役割を見つけた。時間になると，体育館や車中にいる人に声をかけて，集まってきた人たちの輪の中心でラジオ体操をし，ダンスを踊った（図１６）。

【図１６　朝のOLA！のダンス】

イ 縦割り班活動で，関わるよさを感じる

本校ではいろいろな場面で，周囲と関わる態度を育てる取組を行っている。震災の避難生活の中で，児童がいろいろな人と関わりあって活動することができたのは，これまでの活動の中で人と関わるよさを感じてきたからである。

異学年による縦割り班活動は，他の学年の友達と遊んだり，掃除をしたり，給食を食べたりして互いの人間関係を深める機会となっている。縦割り遊びでは高学年が考えて準備した遊びを通してお互いのよさを見つけることができている。縦割り掃除では高学年が低学年を指導しながら担当場所を清掃することでお互いに信頼関係が生まれてきている。また，縦割り給食では食事をしながらの会話や，食事の後の歯みがきを通して互いに仲よくなれている。

学校再開後も、朝の活動時に行う縦割り遊び（青空活動）ではボール遊びや鬼遊び，昔遊び等様々な運動や遊びを行った。縦割り遊びを行う日，いつものように６年生が朝早く登校して運動場にラインを引いたり，運動用具を運んだりして準備をしていると，下級生たちが自然と手伝いをしている姿も見られた。

様々な運動に親しみながら，異年齢の児童同士が関わりあうことで，城東小で共に生活する仲間としてのきずなを生み出すことができている。

ウ　すこやかサミットでの関わりあい（きずな）を力にして乗り越える

今回の地震は，辛い体験ではあったが，本校がこれまで積み上げてきた健康づくりを生かすチャンスでもある。今年度のすこやかサミットは,「いたわり はげましあい きずなの力でのりこえよう」というサブテーマを設けた。友達と学習や活動，行事などを協力して進めることで，お互いのよさを認め合い「きずな」を深め，不安や困難などをのりこえる力としたいと考えた。

様々な人と関わりながら学ぶことを通して，自分の存在が認められ，何かの役に立っている実感を持たせることは「心の健康づくり」においても重要なことである。さらに，心の健康と生活習慣は相互作用があることから，図１７のような内容で，すこやかサミットに向けて取り組むことにした。

	内　容	課題別グループで取り組む内容の例
４年	心と生活習慣	震災後の生活リズムの乱れ（体の反応と心の反応）による心身の不調から，生活リズムの大切さをまとめて，実践する。
５年	心と運動習慣	心と体をほぐす運動によってストレスが軽減された経験から，リラックス・リフレッシュする運動について調べて実践する。
６年	心と食習慣	震災後の食生活の乱れによる心身の影響から，家庭の味・団らん等食事の役割，食事と心身の健康の関係を追究する。

【図１７　今年度のすこやかサミットで取り組む内容】

②お互いに支え合い，安心して生活する

ア　みんなと会えてうれしかった

震災後，初めての音楽の授業。「熊本城や家が崩れたのを見ると悲しくてたまらないけどこうしてみんなといっしょに校歌を歌えたのがうれしい」涙ながらに語る３年生の姿には，

学校でみんな会えたという安心感，また一緒に学べるという喜びがあふれていた。

震災による臨時休業中も「学校に行きたい」「友達に会いたい」という児童。保護者は互いに連絡を取り合って，学校の様子や学校で行われる活動について情報を共有していた。そして児童の安全を確保しながら，可能な限り一緒に登校して少しでも児童を学校とつなぎ，友達と関わらせようとしていた。

【図１８　臨時休校中に登校した児童】

学校に来て友達とビデオを見たり，音楽を聴いたりしながら，一緒に過ごす時間は地震の不安や怖かった体験を忘れるひと時であった。みんなが同じ時間に地震の大きな揺れを体験し，同じように不便な生活の中で一生懸命に生活している。友達との会話の中でそのことを知ると，児童同志のきずなや一体感はさらに強まった。学校にやってくる児童の笑顔には，みんなとつながることで，ともに地震のつらさをのりこえようとする気持ちがあらわれていた（図１８）。

イ　自分のことを素直に表現できる「心と体の健康観察」

各教室の廊下には，自分の健康状態を５段階（やる気まんまん，元気，少し疲れている，少し眠い，体調が悪い）で示す「健康板」を設置している（図１９）。

【図１９　健康板とマグネット】

毎朝，児童は登校すると，その日の自分の心と体の健康状態を見つめ，マグネットで示す。この「健康板」を見ると友達の健康状態も一目でわかり，みんなの心身の状態への関心を高めることができる。

その後の健康観察では，児童は５段階で示した自分の健康状態にその理由を付け加えながら，心身の様子をより詳しく表現している。児童はどのように一日過ごせばよいか考えるとともに，友達の心身の様子も知ることができ，「大丈夫？　きつそうだから代わろうか？」など優しく思いやりのある言動へもつながっている。

どんな時も受け止め支えてくれる仲間がいるから，自分のことを素直に出すことができている。担任は児童の生活の様子や心の状態を理解する手がかりとして，個別の保健指導につなげてきた。

ウ　安心して相談できる体制づくり

余震の恐怖や避難生活などから多くの児童がストレスを抱え，熊本市教育委員会の調査では，市全体の約 3.5%にあたる 2,143 人の小中学生が「カウンセリングが必要」と判断された(本校では，希望者も含め約７%)。

【図２０　健康観察シートに記入する】

そこで，全体の前で発表するこれまでの健康観察から，「自分の体と心をみつめる健康観察シート」（資料９）への記入に

切り替えた。地震直後は，児童の気持ちを無理に聞き出すことや，全体の前で一斉に発表させることを避けた。

学校再開の日の「健康板」には，ほとんどの児童が「やる気まんまん」と示していたが，健康観察シートからは，「余震があって眠れなかった」「命や水，食べ物って本当に大事」「当たり前のことがありがたい。今までが幸せすぎたのかな…」「みんな元気で安心した！ ホッとした！」「ひとりじゃないから，もう怖くない」「みんなと一緒なら頑張れそう」など，子どもたちの様々な心の内を見取ることができた(図２０)。

中には，学校ではこれまでと変わらない様子で過ごしていながらも，家庭では不安が表出する児童も少なくない。家庭には「心と体の健康観察」(資料１０)を配布して，保護者にも児童の様子を丁寧に観察してもらい，連携をとりながら児童の心身の健康状態の把握に努めた。

また，不安を抱えて登校してくる児童の心のサポートについては，地震による臨時休業中に職員の研修を行った。毎朝，家庭訪問や電話等で把握した児童の状況を報告し合い，望ましい対応の仕方や役割分担等の確認を行った。その中では，災害後に児童の心身にあらわれる反応について理解を深めた。そして，児童に大変なことを乗り越えるには，お互いにいたわりはげましあうことが大切なこと，楽しむ時と頑張る時を切り替えることで元気が取り戻されることなどについて伝えることを確認した。

児童が心を開いて相談できるためには，学校職員の心の安定も必要である。職員研修では，児童の指導用に作成したパワーポイントの教材を活用しながらリラクセーションを行った。自分たちが実際に体験しながら，より効果的な指導できるよう研修を深めた。

担任と養護教諭による学級での保健指導では，次の点に留意し安心感を持たせるようにした。

・大変な事があると，心と体はそれに立ち向かおうとしていつもと違ってくること。
・それは誰にでも起きる当たり前のことで，一人一人反応は違うが，しばらくすると自然に戻ってくること。
・心配なことや不安なことは，人に相談するといいこと（無理に話さなくても，自分のペースで）。
・つらいのに，がまんしたり普通にしようとしたりしなくてもいいこと(特に高学年)。

このような学校の取組や方針については保健だよりや安心メール，学校ホームページ，PTA総会などの機会をとらえて保護者に伝え，家庭における子どもの健康観察の意識を高め，学校と保護者が一体となって支援にあたることの大切さについて確認し合った。

さらに，スクールカウンセラーには，児童や保護者のカウンセリングだけでなく，教職員へのコンサルテーションを行うなど，児童のサポートにおける学校・家庭・地域の連携を支えてもらっている。

③　予期せぬ災害にも対応する

ア　地震の不安を減らしてくれたきずなの力

今回の震災では，２度にわたる震度７の地震を経験した。本震の後も大きな地震の可能

性が指摘されていた。児童は突然襲ってくる余震に耐えながら，これからの生活に対する不安の中で生活を送った。そんな児童から聞かれたのは，家族への感謝の言葉である。「お父さんがぼくたちを安全な場所に避難させてくれた」「家族が一緒だから大丈夫だと思った」など，家族とともにいる安心感は，児童にとって大きな力となった。

【図２１　児童に寄り添う保護者】

保護者からは「子どもたちが一番に机の下に隠れたので，自分たちもそれにならって隠れた」「子どもがしっかり自分の身を守っている姿を見て，私たちも冷静になれたので感謝しています」などの声が聞かれた。

本震から約１週間を過ぎたころから，児童は避難所となっている学校に保護者と一緒に登校するようになった(図２１)。これまでと違う学校。運動場の中央に確保されている避難用のスペース。音楽室でビデオ鑑賞やイベントがあるときには，必ずそばにいてくれる大人。掲示板などに掲示された手洗いやうがいなどを呼びかける手書きのポスター。

震災の中でも自分たちの安全を守ってくれる大人たちの姿や，みんなで力を合わせて震災と向き合っている避難所の方たちの姿は，児童にとってはとても頼もしく感じられ，これからどんなことがあっても大丈夫だという安心感につながった。

イ　定例避難訓練

本校では，東日本大震災以降，毎月 11 日を校内安全の日と定め，定例避難訓練を行ってきた。訓練の内容は，主に業間の 20 分休みを使った。地震・火災・不審者に対応した行動である。年間計画を作成し，想定される災害に対する行動訓練の内容を変化させて繰り返したり，抜き打ちで実施したりするなど，様々な災害に対しても自分の命は自分で守ることのできる児童を育成するための内容の工夫をしてきた(図２２)。

月	内　　容	実施時間	想定される災害
4月	二の丸公園までの避難訓練	歓迎遠足	地震後の津波
5月	避難経路確認(避難集合なし)	中休み	火災･地震
6月	不審者対応避難訓練	3校時	不審者
7月	校内での地震発生時行動訓練(避難集合なし)	中休み	地震
9月	地震避難訓練(避難集合あり)	中休み	地震
10月	不審者対応避難訓練(物音を立てずに体育館に集合)	集会集合時	不審者
11月	熊本シェイクアウト訓練（避難集合なし） 児童引渡し訓練	中休み 音楽会終了後	地震 水害･地震
12月	登下校時避難訓練	集団下校	水害･地震･不審者
1月	火災避難訓練(避難集合あり)	中休み	火災
2月	不審者対応避難訓練(放送を聞き、適切な行動をする)	中休み	不審者
3月	校内での地震発生時行動訓練(避難集合なし)	抜き打ち	地震

【図２２　定例避難訓練の年間計画】

また，事前事後指導の指導ポイントについては，実施計画案の中に明記し，実施後の自己評価やその後の継続的な指導に生かせるようにしてきた。３月に行った抜き打ち訓練の

際には，多くの児童が適切な対応ができていた。

ウ　様々な危険に対する対処を知り，安心して生活する

地震後は，不安を抱えている児童の心のサポートの面からも避難訓練等の安全教育を見直した。「また同じようなことがあっても，正しく行動すれば自分の命を守ることができる」という安心感をもたせるとともに，生活の中の様々な危険を自ら予測し，回避する実践力を身につけさせなければならない。そので，次のような取組を行ってきた。

地震後，本校職員で通学路や校舎内外の安全点検を行った。現在被害を受けているところだけでなく，被害が予想される場所を児童と一緒に確認し，危険の予測や回避について児童と共に考えた。このときに作成した資料は，避難訓練の事前・事後指導等に活用できるようにしている。

事前指導では、その資料の写真等をもとに，様々な状況における身の守り方を指導し，避難訓練では「落ちてくる」「倒れてくる」「移動してくる」可能性のある危険個所や複数の避難経路を確認した。児童は地震の経験を通して「ここは倒れてくるかもしれない」「ここのドアが開かなかったら，ここからも逃げられるよ」などの気付きを出し合った。

今回の地震に対する児童の不安が完全になくなるまでは，サイレンや一斉放送を使用せずに担任の指示によって訓練を始めたり，全校一斉に行うのではなく学級単位で実施したりするなど，内容や方法を検討しながら段階的に訓練を行っている（図２３）。

【図２３　クラスで行う避難訓練】

校外学習では，これまで，計画書の指導事項に交通安全に関することのみ記述していたが，地震が起こった場合の身を守る行動について記述し，児童への事前指導に生かした。

このように，児童の心のサポートの視点を取り入れながら，安全管理と安全教育を関連づけ，起こり得る様々な危険や適切な行動の仕方について考えられるようにした。

今後は，様々な状況においても適切に行動できる実践力とともに，「地震の時，家族や地域の人が守ってくれた」という児童の経験を生かし，自分の安全（自助）だけでなく，友達や下級生の安全にも気配りができる共助の心を高められるよう，避難訓練の実施内容や方法の充実を図っていくことが大切だと考える。

④「食」に関する関心を高める

ア　避難所における食の経験を通して

地震による食料品の欠乏や，水道・ガスなどライフラインの被災によって，食事の確保は非常に困難な状況であった。本校避難所では，朝早くから大人が火をおこし，多くの人の手で食事の準備がされて，何百人という避難所の全員に食事が配られた。また，食事の安全面や衛生面については特に徹底され，掲示や放送によって繰り返し伝えられていた。

自分の親や地域の人たちの懸命な姿は，自分たちもできることをしようという児童の意欲を高めた。避難生活が進むにつれて，食器を配ったり，その食器に食べ物をつぎ分けたり，飲み物の容器を手渡したりする児童が増えてきた。

【図２４　児童による食事の手伝い】

食事の準備の手伝いを通した避難所の人との関わりは，児童の食に対する関心を高めることになった。震災から約１か月たつと各地からの配給や支援物資で食生活は安定してきた。その反面で，毎日パンやおにぎり，スープによる朝食が続いていた。「いつも同じような朝食では，朝から元気も出ないだろう」という職員のアイデアで，学級園で育てた野菜を提供することにした。学級園には臨時休業中にレタスが十分成長していた。ラジオ体操のあと，児童は避難している人達とレタスを収穫して，洗ったり切ったりしてサラダを作った。そして，児童は醤油やポン酢，チーズなどを混ぜてオリジナルのドレッシングを作った。「新鮮なサラダはいかがですか」「レモン味がしてぼくのおすすめの味ですよ」 児童の元気な声は避難所の朝を活気づけ，みんなのうれしそうな表情は児童のやる気をさらに高めた（図２４）。

イ　栄養やマナーについて理解し，望ましい食習慣を身につける

本校では，食育の年間計画をもとに，各学年の実態に応じて食に関する指導を行ってきた。特に６年生では，総合的な学習の時間に「心と食習慣」について自分たちの食に対する課題を設定し，課題解決に向かって探求的な学習を行ってきた。その学びや日常生活に生かすことについて，すこやかサミットで全校に広げ，自分の心と体の健康を見つめ直し，心身の健康を大切にした食習慣を考えて実践してきた。

【図２５　楽しい給食の時間】

給食においては，給食当番は，毎日，衛生チェックを行い，衛生面に対する意識の向上を図っている。また，校内放送により献立の紹介を行い，食材の産地や旬について知らせることで食に対する興味を持たせるようにした。これまでの取り組みの成果が見られ，ここ数年，給食の残食がほとんどない状態であり，命を育む食の重要性を理解しながら食事をすることに対する意識が向上した。

ウ　食べることを楽しませる工夫

月に１度，誕生月の児童がランチルームに集まって異学年との交流給食を行っている。昨年度からは，縦割り班ごとの交流給食を行っている（図２６）。異学年との交流に加え，教室以外の場所での会食を楽しんでいた。児童は，震

【図２６　縦割り班での交流給食】

災での避難生活の中で，家族や地域の人など，たくさんの人と一緒に食べることで安心感を持ち，食べることへの感謝の気持ちを持つことができた。

学校再開後初めてのお誕生給食では，これまで以上に笑顔で会食する姿が見られた。そこで，学級単位でもランチルームを利用するようにした。ランチルームでの給食は教室で食べるより会話が弾み，食欲も増してくるようで，日頃なかなか食事が進まなかった児童もいつもより，早く食べることができていた（図２７）。

命を大切にするために,栄養バランスを考えた食事をすることは大切なことであるが,そのこととともに楽しく食べることの大切さにも気付くことができた。

ランチルームきゅうしょくでは, はなしたり, わらったりしてきゅうしょくを食べました。
みんな、きょうしつとちがうっていっていました。だからたのしくたべられました。

【図２７　ランチルームでの給食の感想】

（4）児童会・生徒会の活動状況

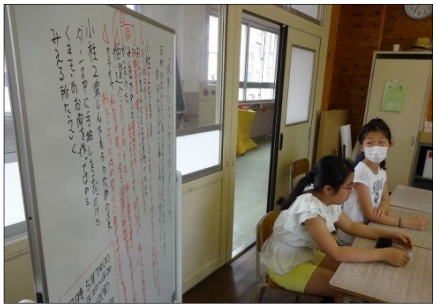
①　避難所でも自分たちにできることを

本校避難所は被災した方たちがリーダーシップをとり，震災直後からスムーズに運営されていた。集団生活のマナーやルールがしっかりと守られ，力を合わせて，自分たちの生活を少しでもよくしていこうという雰囲気にあふれていた。児童もその手伝いを通して自分たちにもっとできることはないかと考え，自発的に行動する姿が見られるようになった。

食事の手伝いでは食べ物を配るだけでなく，食材の紹介や味の説明をしながら渡すようになった。みんなの食事を少しでも明るく，楽しくするように心がけはじめた。サラダを作った時には，避難所である体育館のベッドのところまで行って，一人一人としっかり会話をしながらそのサラダを勧めていた。

規則正しい生活のために朝７時に行っていたラジオ体操の時間は,体操の後に「OLA！」のダンスを取り入れるようになってから,児童が生き生きとして参加するようになった。「OLA！」は運動会で低学年が踊ったダンスで，全校児童がふりつけをおぼえているほど人気がある。７時前になると児童は，体育館や車中にいる人たちにラジオ体操への参加を呼びかけ，その中心に立って体操を行った。児童の「OLA！」のダンスは，避難所の人たちにも大好評で，運動場には笑顔があふれた。みんなが元気に踊る姿に児童は自信を持ち，「私たちの笑顔でもっとみんなを元気づけたい」と毎朝踊っていた。

児童が避難所からそれぞれの家庭にもどり，学校再開も近づいてきた。そこで，一つの区切りをつける意味で，職員が，児童に避難所の人たちとの交流会を持つことを提案した。児童はさらに避難所の人たちと交流できることを喜び，すぐに話し合いを行った。児童は，交流会のねらいを「感謝の気持ちを届ける」「自分たちも避難所の人も元気にする」と設定し，内容や係



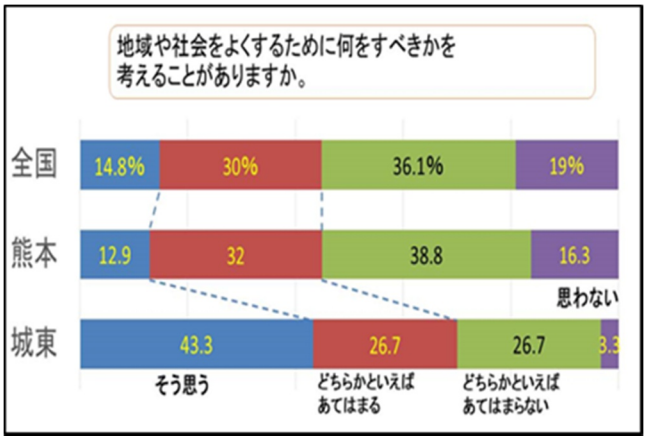
【図２８　交流会に向けた話合い】

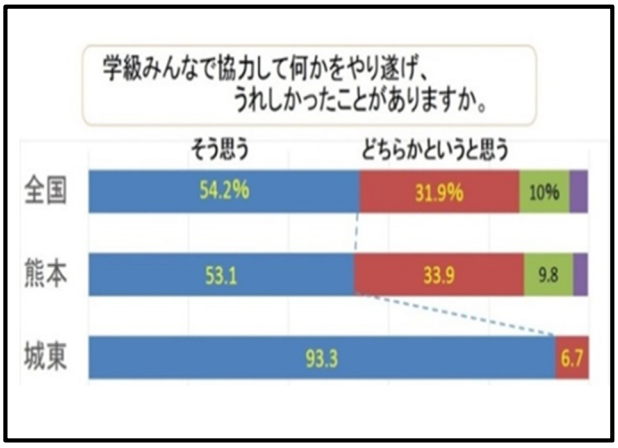
分担などを話し合った。いろいろな学年の児童による話し合いだったが，高学年を司会にスムーズに進んだ（図２８）。

②　やる気をもって自分たちの生活を高めていく委員会活動

本校では，児童の自主的な活動によって生活をよくしていくための力を育成するために，学級会活動や委員会活動などの特別活動を充実させてきた。特に昨年度は，前述の通り，全校代表委員会（情報モラル集会）を行い，「携帯電話(スマホ)やゲームのルール」についての話し合いを行った。その集会を通して自分たちの力で生活をよりよくしていこうとする態度や話し合いの方法を身につけることができた。

４月に行ったアンケートの「地域や社会（学校・学級）をよくするために何をすべきかを考えることがありますか」「学級みんなで協力して何かをやり遂げ，うれしかったことがありますか」の問いへの回答からは，「社会の役に立ちたい，協力してうれしかった」と答える児童が全国や熊本市の平均よりも多いことがわかる(図２９)。





【図２９　H27 全国学力・学習状況調査アンケート結果】

年間を通じて学校行事や集会活動は，児童の企画委員会を中心として，その内容や係分担が決定され，運営されていく。昨年度，企画委員会は，「自分たちの独自のアイデアで学校生活をもっと楽しくしよう」という目標を立て，常に新しいアイデアを取り入れた。これまで体育館の中だけで行っていた児童集会は，校舎全体を使った校内鬼ごっこや，校内宝探しとして活動の場所を校内全体に広げて行われた。

③　関わりを通して，さらにやる気や自信を高める

ア　保健委員会による「歯みがきツアー」

６月と 11 月の校内歯と口の健康週間に合わせ，学期に１回，保健委員会が各クラスを回って，歯のみがき方を指導する「歯みがきツアー」を行っている。昨年度からは，学級の中で特に熱心にみがいていた子どもを「歯みがきチャンピオン」として表彰し，歯や歯みがきに対する関心と意欲を高めてきた。

【図３０　避難所歯みがきツアー】

震災後は,「避難所の方々のためにも歯みがきツアーに行きたい」という声が児童からあがり，昼休みに避難所を訪問して，避難している方たちと歯みがきを行った。

避難されている方の中には，地震の後これまでほとんど歯をみがいていなかったという方もおられたが,児童に促されると喜んで歯ブラシを持って,楽しそうにみがかれていた。この様子には，周りの方も驚かれ思わず歓声が上がったほどだった（図３０）。

児童は，避難所の方たちの笑顔を通して，自分たちへの期待を感じ取り，自分たちの役割として，毎日避難所ツアーを行った。

子どもたちの避難所歯みがきツアーの感想

・普段は，あまり気にしないで歯をみがいている方が，しっかりみがけていてよかったです。
・避難所の人が，しっかり聞いてくれて，最後に「今日はありがとう」と言ってくれてうれしかった。
・避難所のみなさんの役に立てて，とてもうれしい。
・避難所の方々が，私たちの活動で笑顔になったからうれしかった。
・とてもいい体験になりました。喜んでもらえたし，自分もいつもよりもしっかりみがこうと思いました。また，やりたいです。

避難所の方の歯みがきツアーの感想

・これからも，よい歯を続けられますよう，歯みがきをやってね。私たちも負けないように，きれいな歯を維持します。お土産も大切に使います。あなた達の元気な声を聞いて楽しかったです。
・歯みがき教室ありがとう。歯の健康日本１！になっただけのことはあって，教え方もとても上手でしたね。暑いのに，着ぐるみまで着て，楽しませてくれてありがとう。
・色々な触れ合いができて，元気と勇気をもらいました。これから先，どんな事があっても，頑張って生きていこうと思えました。ありがとう！！ これからも，人の役に立つ人になってください。

イ　すこやかサミットに取り組む「すこやか委員会」

７月に行う第１回すこやかサミットは，保健委員会，給食委員会，青空委員会が「すこやか委員会」として，全校児童へのアンケート調査などを集計し，健康課題や実態について発表を行っている。

今年度は震災以降に一斉下校を実施したこともあり，放課後等の準備の期間が十分に取れない中での実施となった。そんな中，児童は，委員会活動の時間はもちろん，始業前や休み時間にも自主的に集合し，担当を決めたり発表の練習をしたりしながらまとめることができた。

【図３１　すこやかサミットの様子】

児童は，単にアンケートの結果をデータで示すだけでなく，避難生活や日常生活の中で体験を通して感じたことや，実践を通して改善できたことなど，経験を通して実感したことや考えたことを付け加えて発表した。震災の中での不自由な生活を経験したことで，健康的な生活について主体的に考え実践しようとする意欲も高まってきた。

そして，そのことを「一緒に震災を乗り越えようとしているみんなに伝えたい，みんなと考えていきたい」という気持ちを高めることができていた(図３１)。

第１回すこやかサミットの感想

・震災で睡眠や食事が十分とれなかった時，苦しくて日に日にストレスがたまっていった。お母さんの作る料理が一番食べたかった。当たり前の食事がこんなに大切と思ってなかったので，地震の後は，嫌いなものでも残さずに食べるようになった。元気の基「食」について調べていきたい。

・「学校から帰った後，外遊びを週に何回しているか？」では，週に２回以下の人が約50%だった。体力テストの結果も去年の方がよかったと分かった。地震で遊べない日も多かったし，私は今でも１日１回も外で遊ばない日があって，どんどん体力が落ちているので，体力面を伸ばす研究を友達と進めて城東小のみんなに知らせたい。

（5）家庭との連携

①　「震災後」も学校は変わらない

震災後に職員が行った児童の安否確認のための電話連絡と家庭訪問。その中では学校の様子や学校再開の時期，他の児童ことを心配する声が多く聞かれた。震災によって学校生活はどうなってしまうのか。みんなどうしているのか。児童だけでなく保護者にとっても大きな不安となっていた。

そこで，可能な限り学校を開放して，臨時休業中も友達と一緒に遊んだり，学習したりする場所として使えるようにした。非常階段に一番近い音楽室ではビデオ鑑賞ができるように暗幕等を整備し，その廊下には図書室の本を並べて読書ができるようにした。子どもたちが活動する場所には，必ず学校職員を配当して子どもの安全を確保した。

次第に学校に保護者に付き添われて登校してくる子どもたちが増えてきた。保護者もできるだけ自分の子どもを学校で活動させたいという思いをもっていた。お互いに学校で行われているビデオ鑑賞や読書・学習など学校の様子をメール等で知らせるなどし，学校の様子を保護者も共有するようになっていた。

【図３２　避難所での楽しいイベント】

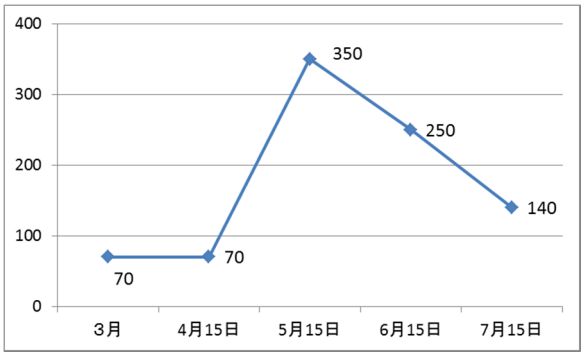
県外各地から，児童を元気づけるようなイベントの申し出もあり，児童は楽しみに登校してきた(図３２)。手品や演劇，音楽の演奏など同じ場所で友達と一緒に過ごすことでさらに笑顔が広がった。その活動には，保護者が必ず一緒に参加して，緊急時に備えていた。そのことで児童は安心して活動することができ，避難所は笑顔と明るい声に包まれていた。

ボランティアで避難所の手伝いをする保護者。児童の活動に付き添い安全を見守る保護者。保護者のつながりと連携によって児童の生活は支えられていた。

②　学校の様子を保護者に知らせる

避難所での生活の様子は毎日，学校のホームページに掲載し，保護者や児童に日々の様子を知らせた。自宅を離れて親戚の家などで避難生活を送っている児童にも，このホームページで学校の様子を知らせることができた。

ホームページの記事を見て初めて学校の様子を知り，学校にやってくる児童もいた。多くの児童が不安で厳しい生活の中，学校の避難所で多くの人ががんばっている姿を知らせることではげますことができたと思う。ホームページの閲覧者が１日平均500件を超えることもあり，１日の中で何回も利用されていることがわかる(図３３)。



【図３３　ホームページの閲覧者数】

学校再開後は，校長室便りや別冊ホームページ「かわら版」などに，避難所での児童の様子や避難していた人からの手紙などを掲載した。学校避難所に来たことのない保護者も，避難所での児童の自主的な行動や，避難所の人たちと関わる姿を知り，さらに学校や学校の取組に対する関心と信頼を高めることができた。

③　「いつも通り」の関わりの中でも，子どもの変化には敏感に

震災後の「子どもの心の安定」を図るには，家庭での生活リズムを整えることと，保護者の心の安定が重要である。そこで，地震による臨時休業中から，保護者に対して安心メール，学校ホームページ，家庭訪問等を通して，ストレス反応がおさまるポイントや家庭でもできる対処法等について啓発を図ってきた。

学校再開後は，家庭で行う「心と体の健康観察」によって，学校の健康観察では気付くことのできない児童の状態の把握に努め，保護者と連携して児童の心のサポートにあたった。また，希望者にはSCによるカウンセリングを行った。カウンセリングは，「子どもだけ」「保護者だけ」「親子一緒に」「学校に任せる」の選択肢を設け，一人一人のニーズに応じた対応に心がけた。

第１回すこやかサミットでは，児童と保護者の交流タイムを設け，親子で健康課題を共有する場面を設けている。今年は，親子で一緒にリラクセーションを行い，学びや活動を通して心のきずなを深めた。

さらに，PTA 役員が中心となって企画した講話によって，保護者同士の連携も見られた。講話は児童のカウンセリングに訪れていたSCを講師として，全保護者に参加を呼びかけて行われた。SCは「子どもたちの心のサポートを考える –明日からも続く生活のために- 」という内容で，児童や保護者自身に起こる心身の変化やセルフケアの方法について講話を行った(図３４)。参加した保護者からは，子どもへの接し方がわかったことで安心できた，という感想が多く聞かれた。多くの保護者が共通する悩みをもっていることに気付き，保護者同士がつながって，児童を見守っていこうという意識を高めていった（図３５)。

【図３４　SCの講話の様子】

・親である私にとっても初めての経験で，子どもの反応や行動がこれでいいのか，どう対応したらいいのかわからず不安でしたが，個人差があることや，ゆっくりと向き合えばいいことがわかり，安心しました。
・地震の後，子どもが赤ちゃん返りしたりキレやすくなっていたりして，どうしてだろう？ と感じていました。正常な反応だとわかり安心しました。
・今，子どもに起きている事やこれから起きるであろう事を知ることができ，子どもの見守り方を勉強することができました。
・リラクセーションで on と off が切り替えられますね。寝る前に，子どもとやってみます。

【図３５　SCによる講話に参加した保護者の感想】

（６）地域との連携

①　安心して過ごすことができた避難所での生活

本校の避難所は，震災直後から被災したボランティアを中心に運営されていた。集団生活のルールとマナーがしっかりと守られており，支え合い協力し合ってこの困難な状況をのりこえようとする意識が強く感じられた。

食糧が不足する中，地域の飲食店の方々が食材を持ち寄り，炊き出しを行った。また，テントの設営や支援物資の運搬や片付け，段ボールベッドの組み立てなど，避難所の設営においても，地域の人たちが力を合わせている姿が見られた（図３６）。

【図３６　避難所のテント設営】

避難していた児童も，食事の手伝いや清掃活動を地域の人たちと一緒に行った。

清掃活動は定期的に行われ，自宅から保護者と一緒に登校してきた児童も参加するようになっていった。学校再開に向けた清掃活動には，低学年から高学年まで多くの児童や保護者が参加した。清掃活動には本校を卒業した中学生や高校生，その保護者も参加し，地域を挙げて学校再開の準備を行うことができた。

②　避難所で発揮された地域との連携

本校の運動場では，毎年盆踊りやどんどやなどの地域行事が行われている。児童や保護者・学校職員も準備から参加し，地域と学校・保護者が一体となってそれぞれの行事を行ってきた。近年，地域の高齢化が進んだことによって，地域の行事において学校や保護者の役割は重要になるとともに地域のさらなる結束が必要になってきた。

今回の地震において避難所がスムーズに運営され，避難者全員が安心して生活することができたのは，地域の団結力と学校との連携が十分取れていたからに他ならない。そのおかげで，不自由な避難生活の中でも笑顔にあふれ，活気に満ちていた。本校の避難所を訪れた人からは「ここは避難所と思えないほど楽しそうに生活している」と言われるほどだった。

職員も食事の手伝いや世話，清掃活動などの避難所業務を行った(図３７)。地域の人たちと共に活動する中で自然と交流も深まっていった。余震の回数も減り，大きな地震の心配も少なくなってきた時点で，地域と学校・児童の親睦を深めるために，児童と避難所の人たちの交流会や，学校職員・保護者と避難所の人たちとのスポーツ大会を企画した。

【図３７　職員による食事の手伝い】

③　地震で気付いた地域のよさを教育に取り入れる

避難所での地域の人たちとの交流は，児童だけでなく学校職員にとっても地域のよさに気付き，地域の人たちの思いに触れる機会となった。避難所の中では，子どもの頃の学校や上通商店街のこと，地域の中での遊びなどの話をたくさんうかがった。いろいろな年代の方が，とても懐かしそうに，そして誇らしげに話されていた。

これまで，総合的な学習の時間や生活科で，地域のお店や施設を取り上げ，その様子や商品や仕事について調べる学習を行ってきた。今回の地震では校区の商店街には大きな被害を受けた店舗も少なくない。しかし，お店が営業できるようになるまで避難所に足を運んで炊き出しをされる方，なんとかお店で調理ができるようになったと食事を運んでこられる方，お店の商品を避難所に提供される方など，自分たちの地域を自分たちで守ろうとする気持ちがとても伝わってきた。

このような温かい支援を受け，身近な地域のよさや人と人とのきずなを実感して迎えた学校再開。３年生の総合的な学習の時間のテーマを，「上通探検隊」から「大好きなまち　城東」とした。ねらいは，「地域の人や地域のことを調べることを通して，地域への誇りを高め，自分にできることを考える」と設定した。「校区のもの」だけでなく「校区のひと」への視点も取り入れて学習計画を作成した。

さっそく，３人の地域の方を教室に招いて，子どものころの町や自分たちの生活の様子を話してもらった。児童は，その話から子どものころから大好きだった町を，今でも大切に思われていることを感じ取り，もっと多くの人にも聞いてみたいという意欲を高めた（図３８）。

【図３８　地域の方が語る子どものころの話】

４年生でも「私たちのほこり！ 熊本城」というテーマを設定し，熊本城にかかわる人物への探究活動を取り入れた。このように地域を取り上げて学ぶ学習に，「ひとと関わる」視点や活動を加えることで，より児童の生活や将来と結びつけることができた。

3　成果と評価

（1） 成果の状況

① これまで行ってきた健康づくりの再評価

【図３９　運動場を整備する中学生】

震災のあとは雨が続き，運動場は避難のための車両のタイヤの跡で荒れてしまっていた。もとの状態に戻すためにはどれだけ大変だろうと，誰もが半ばあきらめかけていた。その運動場に３人の中学生の姿が見られた。「城東小の避難所で，みんながんばっている。僕たちに何かできることはないか」本校の卒業生が，運動場をわずか３人で整地していたのである（図３９）。校内の清掃活動，学校再開に向けての愛校作業にも多数の中学生が参加した。「僕たちは卒業しても『まごころをつくすこども』です」と卒業の時に語った言葉が思い出された。

「地震が起こってここに来た時には，もう人生が終わってもいいと思っていたけど，ここで見た子どもたちの姿に元気をもらい，もう一度がんばりたいという気持ちになった」本校に避難された 90 歳の方の言葉である。避難所で発揮された児童の主体的な行動や，人と関わる態度は避難所の方々を元気づけ，大きな希望へとつながった（図４０）。

◇城東小のみなさん，たくさんの笑顔ありがとう。食事おせわのボランティア，大変でしたね。いつも元気な声と笑顔に勇気をもらいました。みんなのおかげで辛いはずの避難生活も楽しく元気に過ごせました 。
◇ありがとう！城東小学校で生活できて本当に良かった！みんなのおかげで元気になりました。これから先どんなことがあってもがんばって生きていきます。みんなの笑顔忘れません。本当にありがとうございました。

【図４０　避難所の方から児童への手紙】

避難所の方の感謝の気持ちは児童にもしっかりと伝わっていた。学校再開後も児童は避難所である体育館を訪れ，避難所閉鎖まで避難所の方と一緒に朝の体操・ダンスを行った。

これまで本校は，校訓「まごころをつくすこども」に示される子ども像を目標として健康づくりを中核にした教育に取り組んできた。その成果が，非常時である避難所での生活の中や，卒業後の中学生の具体的な行動としてあらわれていた。

② 児童の姿を通して生まれた連携

「家族が一緒にいたから安心できた」「お父さんが家族を安全な場所に避難させてくれた」家族のつながりが，児童にとって震災の不安をのりこえる力となっていた。臨時休業中も児童と一緒に登校し，様々な活動を見守ってくれた保護者。学校再開後は，児童の健康観察や個別の相談など，学校が一緒になって「子どもの心身のサポート」を行ってくれた。

震災を通して家族のきずなの強さに改めて気付かされ，学校と保護者のさらなる連携の必要性を感じた。学校再開後「校長室だより」や「別冊ホームページ」では，避難生活での交流や児童の自主的な行動，避難していた方々の手紙を紹介した。保護者から「その場にいなかった自分たちの心にも，子どもたちの行動が伝わった」「自分たちも子どもたちを見習ってまごころをつくしたい」という感想が寄せられた。震災の中での児童の姿は，保護者の学校に対する理解や信頼をさらに深めることができたと言える（図４１）。

○困難な状況の中にあっても人のため何かをする。何かができたという体験は大変貴重だと思います。それをこうしてお伝えいただくことでその場にはいられなかった私たちの心にも伝わります。ありがとうございます。
○地震は本当に怖かったです。しばらくは何も手につかず，心ここにあらずの状態でした。「かわら版」を読んで，自分が大変な時にこそ周りの人に気を配り，まごころをつくす人になりたいと思いました。
○避難所生活で子どもたちは成長しているんですね。大人が気づかないうちに，いろいろなことを学び，助け合い，学習しているんですね。今回一番分かったのが人のやさしさ，物の大切さ，助け合いの精神だと思います。

【図４１　別冊ホームページに寄せられた保護者の感想】

また，運動場を整備した３人の行動は中学校の職員にも高く評価された。３人の中学生に気付いた小学校・中学校の職員が一緒に運動場の整備を行った。このことは，本校の卒業生の中学校での様子や，小学校のころの様子について情報を交換するきっかけともなった。校舎が隣接しながらもあまり話す機会（きっかけ）のなかった小中学校の職員が，子どもの話題で交流する場面も増え，日常的に連携を図ることができるようになった。

（2）今後の課題と対策

①　成果としての児童の姿を持続させる

避難所での児童の自主的な行動から，学校で学んできたことを生活の場面で役立てようとする態度が育っていることがわかった。人と関わりながら自主的に活動する姿や，責任をもって行動する姿など，今後の学校生活でさらに伸ばしていかなければならない。

児童の中にはまだ地震の不安から，心身が完全にもとの状態に戻りきっていない者もいる。今後も一人一人の様子に気を配りながら，少しずつ健康な心身の回復に努めていかなければならない。震災を経験して児童に寄り添い励ますことの大切さにも気づいてきた。不安を抱えながら登校してくる児童にもしっかり目を向けていかなければならない。

本校では，毎週月曜日に児童理解の職員朝会を行っている。常に課題意識を持って，児童の様子や変化に敏感に気付く，そんな職員集団でありたいと思っている。本校では，全職員がすべての学級の担任という意識を持って児童の様子に気を配っている。

②　日常の小さなことの積み重ねの大切さ

「熊本城はくずれてしまったけど，石垣を積み重ねるようにがんばりたい」と語った３年生。教室のすべての窓から熊本城が見え，熊本城とともに学校生活を送ってきた児童。落ちてしまった天守閣の瓦やくずれてしまった石垣を見て，改めて地震の大きさ・恐ろしさを感じたのかもしれない。しかし，児童はしっかり前を向いてのりこえようとするたくましさとしなやかさを持っている。

この震災での児童の姿を通して，我々職員は自分たちが今まで行ってきた教育が非常時にも生かされたことを実感し，自信を高めることができた。そして，今後も１つ１つの取組を積み重ねて，何事にも負けないすこやかな子どもへと育てていかなければならないと決意を強くした。

「心身ともにすこやかな子どもの育成」に取り組んできたこれまでの歩みを，さらに確実に進めていきたい。